

1 大阪湾奥域におけるアユ仔稚魚の出現状況

○ 大美博昭¹⁾・日下部敬之¹⁾ (¹⁾ 環農水総研)
 矢持 進²⁾・恩地啓実²⁾ (²⁾ 大阪市立大学大学院)

1. 目的

大和川流域の環境改善を目指して国土交通省、流域自治体が参加した「C プロジェクト計画 2006」において、“アユが 100 万尾遡上する大和川を目指す”との目標が謳われた。本研究はその目標の達成を目指して行っているものである。アユは両側回遊魚であり、前半生を海域で過ごす。海域での生残が遡上量に大きく影響するため、海域における生息環境の把握が重要だが、大阪湾奥域におけるアユの海域生活期の生態に関しては未だ不明な点が多い。そこで、湾奥域におけるアユ仔稚魚の出現状況を把握するために、大和川、および大和川に比べアユの遡上量が多い淀川において各種ネットを用いた採集調査を行い、出現状況を比較した。

2. 方法

大和川河口域では 2008 年 10 月～2009 年 3 月に、淀川感潮域（河口～淀川大堰の間）では 2007 年 10 月～2008 年 4 月および 2008 年 10 月～2009 年 3 月にアユ仔稚魚の採集を行った。アユは体長 10～20mm になると分布域を沖合から波打ち際へ変化させることから、沖合（淀川感潮域では流心部）から波打ち際にかけて調査定点を設けた。大和川では稚魚ネット（沖合）、小型曳網、灯火による採集（波打ち際）を、淀川では稚魚ネット（流心部）、小型曳網、地曳網、ビームトロール（波打ち際～沖合）を用いた。

3. 結果および考察

淀川感潮域では流心部で体長 4.7～6.5mm、岸沿いの波打ち際で体長 8.1～33.0mm、波打ち際からやや沖合では 26.0～61.7mm の個体が採集された（図 1）。アユの海域生活期における特徴である波打ち際への接岸など、成長に伴って分布域が変化の様子がみられ、淀川感潮域が流下後から遡上までの生息域となっていることが明らかになった（図 2a）。一方、大和川河口域では沖合で 11 月に体長 4.9～5.5mm の上流から流下してきたと思われる個体が採集された。また、波打ち際の調査では 12～1 月に 23～36mm の個体が採集されたが、淀川で採集されている体長 10～20mm の個体は出現しなかった（図 1）。波打ち際に接岸するサイズの個体が採集されなかったのは、大和川河口域には流下後のアユが生息する場所が無く生き残れないことが考えられ、12 月以降に大和川で採集された個体は隣接する淀川生まれの個体が偶発的に来遊した可能性が高い（図 2b）。偶発的な来遊では遡上量の増加は見込めず、大和川の遡上量増加のためには河川内での生息量、産卵量の増加を前提として、大和川生まれのアユが大和川河口域で育ち、そして大和川へと遡上する環境が必要と考えられる。

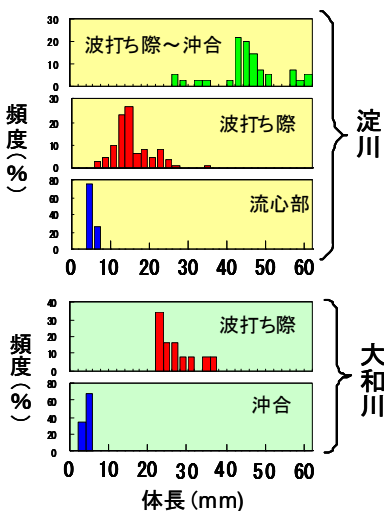


図1 淀川および大和川で採集されたアユ仔稚魚の体長組成

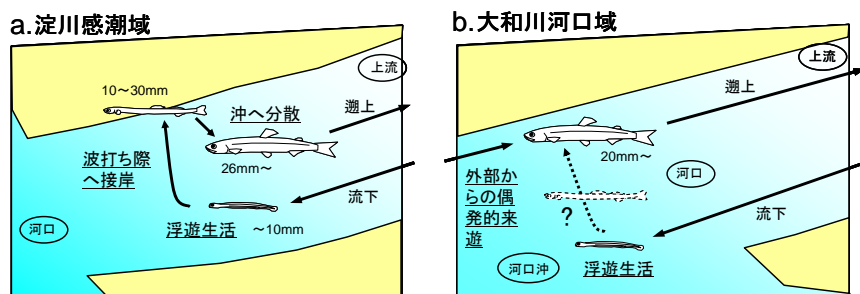


図2 今回の採集結果から想定される淀川感潮域、大和川河口域におけるアユ仔稚魚の出現状況

